診療室

超音波検査の魅力にとりつかれて

高橋雅弘[†]（高橋ペットクリニック院長）

このたび，宮崎市のワールドコンベンションセンターで開催された平成21年度日本獣医師会学会年次大会において，小動物部門獣医学術学会賞をいただいた．

学会賞をいただいた演題名は「小腸内異物の犬43例および猫1例における超音波所見」である．内容は演題どおり，異物を腸につめた症例の超音波検査における見え方の検討である．近年，小動物医療領域はめざましいほどの高度診断機器の導入が進んでおり，MRIやCT検査なども患者に供給できるようになった．超音波検査装置もその流れで高解像化が進み，最新の装置はフルデジタル化し，最高の解像度を提供してくれる．

そんな超音波検査装置と私の出会いは，今から十数年さかのぼった学生時代である．そのころすでに大学病院には，カラードプラを備えた超音波検査装置が，導入されていた．その当時は大学の先生が超音波検査を実施している傍らで患者を保定していたが，残っている記憶は，うとうとと居眠りをしていたことだけで実際，その写し出される画像を解釈することは到底できなかった．また，その当時の教科書は，何が写っているのかさえも理解不能なものだった．

超音波検査の魅力にとりつかれるきっかけとなったのは，父親であり当院の先代の故高橋　健院長である．自分のイメージとして，超音波検査は頻繁に行うものではないという認識があり，他の部屋に移動するか，奥から超音波検査装置を出してくるかというものだった．まず驚いたのは，超音波検査装置が常に診察台の横においてあったことだ．診察自体においても色々な症状で来院する患者に対して，聴診器をあてるような感覚でどんどん超音波検査を実施していた．このような診察の中で，マジシャンのように診断をしていく姿をみて，度肝を抜かれた．食欲不振のみで来院した動物の紐状異物を診断し，体にできた膿瘍に超音波検査を行い，竹串や草のみを検出した．またわずか数mmの副腎を評価し，脾臓にできた小さな腫瘍を発見し，血管に血栓ができていることを確認するなど当時の自分には，衝撃的であった．また，外科的に摘出した臓器や異物などを水で満たした洗面器の中に入れ，再度超音波を当て，どのように見えるかを確認していた．多少型破りな診察だったが，自分の中にあったレントゲン検査実施後に超音波検査という固定観念が崩されてしまった．

自分でも同じような形で検査をしてみると，最初は思うように診断できない．他人が検査している姿から，容易に診断ができるように思えたが実際自分で試してみると見えるものが違ってくる．しかし根気強く見ていると，だんだん正常所見が判断できるようになってきた．正常所見を理解し，いつもと異なった画像が出てくると，確定まではできないが，異常であることがわかるようになってきた．だんだん面白くなってくる．そのうち異常所見を判断し，診断，評価が行えるようになってきた．また，血液検査やレントゲン検査では正常であっても，超音波検査で異常を示す疾患にも遭遇し，確定診断までのスピードが速くなることを感じた．小腸内異物もその一つである．実際，動物が食べてしまう異物は様々なものであり，超音波検査でも様々な所見を示すが，ある一定の規則に従っていることに気付いた．またその診断の感度と特異性が高いことにも感銘を受けたので，今回の発表に至った．

それでも自分は，超音波検査所見の全てを理解しているわけではない．まだまだわからないことも多く，日々疑問を抱えている．だからこそ奥深く，これも超音波検査の魅力ではないかと思っている．もちろん超音波検査のみで，なにもかもが理解できるわけではない．しかし多くの情報をもたらしてくれることはたしかで，病気の診断の一助となっている．このように超音波検査の魅力にとりつかれて，日々の診察が楽しくなったことは間違いない．

最後に学術賞の受賞にあたり関係者ならびに支えていただいた方々にこの場をかりて，感謝申し上げたい．

高橋雅弘

—略　歴—

1997年　日本獣医畜産大学（現日本生命科学大学）卒業後埼玉県蕨市にて勤務

2001年　現所属である福岡県春日市の高橋ペットクリニックに勤務

† 連絡責任者：高橋雅弘（高橋ペットクリニック）
〒816-0851　春日市昇町6-31　☎092-581-5347　FAX 092-581-6982　E-mail : takapet@csf.ne.jp